



新潟県小学校校長会 制度部長 丸山 吉次

人を育てる

以前、あるテレビ番組で、ガラパゴス諸島のイグアナの変化について放送していた。海イグアナは、鋭い爪で体を岩場に固定させ、海中の海藻を食べる。陸イグアナはサボテンの実が上から落ちてくるのを待って食べる。エルニーニョ現象の頻発・強化による温暖化で海藻が育たないことが多くなると、ハイブリッドイグアナが誕生したという。鋭い爪をもち、それを使ってサボテンを自力で登って食べることでできる。正に環境の変化に合わせた生き残るための進化である。

今、少子化の波が押し寄せ、教育環境にも大きな影響を及ぼしている。当校の児童数もこの二十五年で半減した。それに伴い教職員数も減少している。教職員の異動サイクルも今年度末から短くなる。こんな環境の変化の中で、学校づくりにとって最も大切な教職員をいかにして育てていけばいいのか。

例えば、ジョブローテーション。専門性を高めることはもちろん大事だが、小規模校で、異動サイクルが短くなることを考えたとき、オールラウンダーを育て、マネジメント型の人材を育てることが組織力の強化に結び付くのではないか。若手、中堅にいろいろな分野を積極的に経験させる。誰もが同じ業務・立場を経験し、互いの支援体制がいつでも取れるこのシステムの活用が組織力強化、マンネリ化の防止に結び付くはずだ。そして、広い視野をもつ人材を育てることもつながる。

教育が変わろうとしている今、時代に適したハイブリッドな人材を育てなければならぬ。それならば、環境の変化に合わせて、人を育てる仕組みも変えていかなければならないと思うこの頃である。変化することを楽しみながら挑戦したい。

大会の概要

全連小・高知大会報告

第六十八回全国連合小学校校長会研究協議会高知大会が、十月二十七日・二十八日の両日、高知市を会場に開催された。

本大会は、第六十五回三重大会から続く「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を研究主題に研究を推進し、成果を上げてきた。副主題を「社会の変化に主体的に関わり 共に豊かな未来社会の創造に挑む子どもの育成」とし、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性を究明することをねらった。

大会一日目の午前は、文部科学省初等中等教育局視学官の藤原一成氏より、教育再生実行会議第九次提言「全ての子どもたちの能力を伸ばし可能性を開花させる教育へ」の主旨や学習指導要領改訂について、これからの教育課程の理念や方向性等を確認し、その意義を理解すること、今後のスケジュールとして二十九年度周知徹底、三十年先行実施、三十二年度全面実施であることの説明があった。

午後は、五領域十三分科会に分かれて研究協議が行われた。各分科会では、これまでの大会の成果や課題を確認し、

本大会の提言にある「学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性」を明確にするための活発な討議が行われた。また、第十一分科会では、長岡市立枋尾東小学校の櫻井真理校長が「米百俵の精神を受け継ぐ『熱中！感動！夢づくり教育』を核とした教育課程の具現」の研究発表を行った。

大会二日目の全体会では、研究協議のまとめが示され、五領域の中で、校長のリーダーシップとマネジメント力の向上、校内におけるミドルリーダーの育成、校長の企画力・行動力が地域の発展につながることを等的重要性が確認された。その後、九項目の決意が大会宣言として提示された。

シンポジウムでは、森澤紳勝氏（日本トリム社長）、白田久子氏（女優）、山本一カ氏（作家）の三名をシンポジストに、「変革・チャレンジ・未来創造」に沿った対談が行われた。各氏の人生の変革時に直面したときに行ったこと、チャレンジしてきたこと、未来への提言などを拝聴した。

最後に閉会式で、第六十九回全連小研究協議会が佐賀市で開催されることを確認し、本大会が終了した。

大会の概要

関ブロ・東京大会報告

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックを控えた首都東京で、第六十八回関東甲信越地区小学校長研究協議会東京大会が、六月九日・十日の二日間にわたって開催された。

本年度で四年目となる「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の大会主題の下、副主題を「心豊かに生きることでできる社会の実現を目指す」豊かな発想力や創造性を身に付けし 共に学び続ける子どもを育む学校経営」と設定した。この副主題は、新潟大会の成果を受け継ぐとともに、大会主題の理念を具現化するものである。この中には、これまで経験したことのない急速な少子高齢化等の厳しい社会情勢の中で、これからの学校は、「未来を切り拓く力を身に付けたたくましい人材を育成する」という強い使命感が込められている。また、次期学習指導要領に向けて私たち校長の果たす役割が今まで以上に大きくなる中、本大会では校長に求められる学校経営能力を多様な視点からとらえ、これからの小学校教育の在り方を追究することを目指して研修を深めた。

一日目は、開会式と記念講演が行われた。全体会の「都県だより」では、磯貝芳彦県小学校長会副会長が、おもてなしの心で臨んだ昨年度の新潟大会への感謝に続いて、取組を述べた。尊敬を勝ち得る校長会を目指して、その原動力になっている制度部・福利部・

研修部・広報部の活動を通して、「校長が主語」を意識しながら共に学び合い、共に高め合う校長の姿が報告された。記念講演は、二会場に分かれて行われた。一つは、東京大学名誉教授の養老孟司氏による「子どもたちの発想力や創造性を開発する」という講演である。もう一つは、筑波大学客員教授の竹村富士徳氏による「七つの習慣」をベースに考

える、二十一世紀を生き抜く子どもたちのリーダーシップ教育とは?という講演である。どちらも本大会の主題に迫るもので、未来を見据えてどうビジョンを描くかを考えさせられるものであった。二日目は、十二分科会二十四分科会に分かれて研究協議が行われた。提言について参加者で協議を深め、学校経営の戦略に生かすという本大会の特色が発揮されていた。

上越地区小学校長研究集会報告

○期日 平成二十八年九月九日(金)
○会場 妙高市文化ホールほか

上越地区小学校長研究集会が、早秋の山々を臨む妙高市文化ホールを主会場として、午後日程で開催された。

開会式では、磯貝芳彦県小学校長会副会長が、「人間を変える学問でなければ学問ではない。校長は学校を預かる最高責任者として、まず自分自身を

変え、自ら範を示して学校を変えていくことが必要。信頼を勝ち得る校長会として、今日の研究集会での学びを大切にしていこう。」と会員に呼び掛けた。次に、川住晴彦大会実行委員長が、「四年サイクルの研究周期の最終年度。様々な課題に校長としてどのように取り組んでいくか。会員一人一人がリーダーシップを発揮し、大会主題の達成に向けて研修しよう。」と述べた。

このうち、来賓の佐藤幹夫上越教育事務所長様からは、「本研修が実り多く、これからも創意に満ちた特色ある学校の創造に寄与するものとなるよう期待している。」との激励、御祝辞をいただいた。また、入村明妙高市長様からは、「校長先生方の教育に対する熱意に敬意を表するとともに、自然の摂理の中で精一杯生きようとしている全ての子どもたちをよい方向に導いて欲し

い。」との期待を込めた御祝辞をいただいた。

開会式に続いて、吉田光夫県小学校長会研修部副部長による大会趣旨説明があり、その後、十の部会で協議を行った。

本大会では、各自が「校長を主語」とする実践レポートを作成し、レポートをまとめた「実践事例集」を事前に読み込んで協議に臨むこととし、主体性を重視した。また、円滑な部会運営のために、部会関係者に部会の流れや役割を予め示し、当日には綿密な打合せをもった。

各部会とも、「校長を主語」にした活発な意見交換、情報交換がなされ、研究主題に迫る協議が行われた。参観いただいた関係各位からは、質の高い協議であったとの評価を得た。

結びに、本大会の開催に御支援をいただいた関係各位、御協力をいただいた上越市小学校長会第八ブロック会の皆様に深甚なる感謝を申し上げ、大会の成果を「創意と活力に満ちた特色ある学校の創造」につなげたい。

中越地区小学校長研究集会報告

○期日 平成二十八年十月五日(水)
○会場 小千谷市民会館ほか

「少人数でたっぷりと話ができただ。日ごろ聞いてみたかったことを先輩の校長先生方に相談できてよかった。明日からの学校経営に役立つ。」

これは、分科会終了後の玄関ホールで聞かれた感想である。

全国連合小学校長会の研究主題を受け、新潟大会副主題として「未来を生き抜く知を磨き 絆を強め 学び続ける子どもを育てる学校経営」を掲げ、昨年の関プロ新潟大会を引き継ぎ、四年次を迎えた。今年度は、小千谷市を会場に開催され、中越地区の会員百七十三名が参加した。

開会式では、腰越秀夫大会実行委員長が、「少人数で研修を行うようにした。参会者にとって実り多い時間としてほしい。」、柳恒雄県小学校長会副会長が、「教育環境が大きく変化し、これに対応する力が求められている。実践を持ち寄り、研修を深めていただきたい。」と述べた。

中越教育事務所長丸山辰志様、小千谷市長大塚昇一様、魚沼市長大平悦子様他、多くの方から来賓として御臨席いただき激励を頂戴した。丸山所長様からは、「以前は、『教育に自由を』という要望があったが、近年その声が高まら

ず、教員の自律化の低下を危惧している。次期学指導要領の方向を踏まえた学校経営をしてほしい。」とお話いただいた。

レポートの配付は、全レポートをCDで事前配布する方式を踏襲した。協議は、十分科会二十五分散会の三十三グループに分かれ、五、六人で行った。会場の関係から、小千谷市民会館と小千谷小学校に分かれての実施となった。主管した小千谷・魚沼校長会員は全部で十七名のため、司会、記録を各地区の校長が、世話役を小千谷・魚沼の校長が担当した。各分科会では、会員の主体的な参加により、レポートから多くを学ぶとともに熱心な協議が進められた。終始緊張感が漂い、白熱した意見が交わされた。

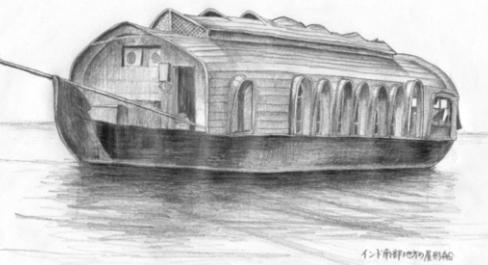
次年度は、新たな大会主題の下で学校経営に当たることとなる。多くの課題を抱え、問題が山積している現代、これからの教育の方向性を見据え、今大会の成果を生かし、さらに発展した取組となるよう邁進していきたい。

下越地区小学校長研究集会報告

○期日 平成二十八年十月六日(木)
○会場 五泉市立愛宕小学校

「未来を生き抜く知を磨き 絆を強め 学び続ける子どもを育てる学校経営(四年次)」を大会主題にした研究集会が、五泉市立愛宕小学校を会場に開催された。心配された台風十八号も前日の夜半過ぎに佐渡沖を通過し、当日午後日程の研究集会には、下越地区の会員二百五名が参加した。

開会式では、近藤朗県小学校長会長から「本大会主題を締めくくる記念すべき大会である。新しい教育課程の編成が始まろうとしている今日、校長を主語とした熱い討議を行ってほしい。」とあいさつがあった。続いて、有本秀雄実行委員長が、歓迎の言葉を述べた。来賓として、下越教育事務所長佐藤政志様、新潟市教育委員会教育長前田秀子様、五泉市長伊藤勝美様他、多くの方々から御臨席いただき、激励並びに歓迎の御祝辞を頂戴した。



（下）舟師の舟師の舟

大会趣旨説明では、後藤一雄県小学校長会研修部長から「本大会主題の成果と課題を確認し合う大会となる。一

人一人が鋭い先見性と高い見識をもち、校長としての互いの実践を出し合い、レポートをもとにした活発な協議が行われることを期待している。」旨の話があった。

分科会では、十部会二十二分科会で構成され、それぞれの所属人数は九人もしくは十人とした。会員が事前にレポートを読み、課題意識をもって臨むことができるよう、恒例となったCDの事前配付によるレポート送付を行った。また、司会者と世話係が事前にレポートの内容をもとに協議の柱を絞り込み、分科会の充実を図った。当日は、一時間四十分の限られた時間ではあったが、活発な協議がなされ、互いのレポートから学び合い成果を確認し合う実り多い分科会となった。

五泉大会の成功に向けて、五泉市・阿賀野市・阿賀町の会員二十六名で実行委員会を組織し、打ち合わせを重ねるとともに入念にリハーサルを行った。当日は、皆様の御協力のおかげで、研究集会がスムーズに進行し、予定通り全日程を終了することができた。

次年度は、今大会の成果を踏まえた新たな大会主題の下、さらに発展した研究集会になると確信している。

郡市だより

お互いの顔が見える校長会

村上市岩船郡小学校校長会

村上市岩船郡小学校校長会は二十三名の会員で構成されており、「故郷への誇りと愛着を大切にしながら、たくましく生きていくことのできる子どももの育成」を目指して活動している。

一 活動の重点と組織

今年度は「お互いの顔が見える校長会」を合い言葉に、会員相互が緊密な連携を取り、学び合いを深める中で一人一人の校長力を向上させ、村上市及び岩船郡の小学校の教育課題の解決を図ることを重点としている。

そして、この重点達成のために研修部、福利部、制度部、広報部の四つの専門部を設け活動を行っている。その中から二つの活動について紹介する。

活動一 学校管理運営研修会

標記の研修会を春の早い段階で開催した。下越教育事務所学校支援第一課長と管理主事から、学校管理上の諸課題について講話をいただいた後、四人程度の小グループに分かれて、自校から非違行為を出さないための管理職の働き掛けはどうかあればよいか、多忙化解消に向けた実効性のある取組のための学校経営はどうかあればよいか等について協議を行った。新任校長からは、

危機管理意識をもって学校経営に当たる上で有意義な研修だったという声があり、今後も継続していく予定である。

活動二 機関誌「むらかみ」の発行

「お互いの顔が見える校長会」を具現化するために、年二回機関誌を発行している。内容は、各校の特色ある教育活動、地域の伝統文化、個人の趣味などの紹介や随想など多岐にわたる。お互いの人となりを理解し合う上で大変有効であり、校長相互の距離感を縮めている。

二 今後の課題

村上市では、児童数の減少を踏まえ統合に向けた動きが始まっており、学校数の減少とともに会員数も今後減っていく。校長会としてのこれまでの実績を財産として、県小学校長会との連携を大切にしながら、組織や活動内容の改善を進めることが課題である。



学校紹介

「ブナ林から日本海まで」の豊かな自然と文化を愛する子の育成

上越市立谷浜小学校

谷浜小学校は、上越市の西部、桑取川の下流に位置しています。海岸近くまで山が迫り平地は少ないですが、小学校周辺には、たにはま保育園、潮陵中学校、谷浜公民館が隣接し、学びのエリアとなっています。

谷浜小学校の児童数は五十四名。地域の課題である過疎化が学校にも影響しています。この地域の未来を支える子どもたちを地域で育てなければならぬという思いから、谷浜小学校は潮陵中学校と今年度から小中一貫教育を推進しています。小規模校のよさを前面に出しながら、地域を活性化させ、地域を愛する子どもたちの育成に取り組んでいます。その中核に「ブナ林から日本海まで」の豊かな自然と文化に学ぶ活動を据えています。そして、これらの活動を全学年の教育課程に取り入れ、地域のよさを学んでいます。

春は谷浜海岸、秋は桑取川上流の上越の水源の森まで遠足に行きます。地域を歩いて豊かな自然を体感しています。そして、この土地ならではの豊かな自然や生活文化を教材に、体験を通して学んでいます。その感動を俳句に表す活動を通して、言葉を選び、豊かな

な表現活動の実現を図っています。

九月十五日には、谷浜観光協会の方から「義の塩作り」を五・六年生が学びました。揚浜式の製造法は手が掛かります。一つ一つの作業に意味があることを知り、先人の知恵を感じました。



海水撒き

また、四年生は、桑取川の生き物調査、桑取川漁業協同組合の支援を受けて、稚魚の飼育・放流、「魚の森づくり」活動に取り組み



魚の森づくり活動

など、地域の自然環境の保護と漁業資源の保護との関わりを学んでいます。学校だけでは子どもは育ちません。地域の方々の力を借りながら、「地域の子どもは地域で育てる」を実践しています。